

仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究

——「心の教育」の所在を探る——

研究代表者 皇 紀夫

共同研究者 門脇 健・関口敏美

山内清郎・大野 僚

I) はじめに

私たちは、平成18～19年度「一般研究」として上記の研究テーマで共同研究を進め、平成20年3月に研究成果報告書（科研）を作成した。本研究の目的と研究方法に関しては、本研究所『研究所報 No. 51』（2007.10）に記載した立場を基本として、そこからの展開と修整を試み、本研究が目指した課題への独自の研究が達成できたと考えている。研究の概要については、『研究所報 No. 53』において、研究成果報告書の目次を紹介することでそれに替えた。本研究は科研費〔基盤研究（C）〕をもとにした研究であり、その成果は科研報告書としてかなり大部な冊子がすでに公表されている（平成20年3月、課題番号18530631）。その内容をここでの限られた紙面で要約することは困難であり、また共同研究者の成果を的確に再現できるとも思われない。従って本紀要では、研究成果の全体的な総括という形ではなくて、研究内容の一部を事例的に紹介することでもって「成果報告」とし、その全体に関しては科研報告書に譲ることとしたい。

本報告は、科研報告書の第1章「資料の“見立て”に関する説明」及び第3章「仏教教育言説の分析（臨床教育学的試み）」（皇執筆）の部分を紹介することにした。二つの章のみを部分的に取り出すことによって、研究全体の文脈や内容を語ることはとてもできないし、そのようなやり方は共同研究者に失礼であるが、与えられた条件の下で私たちの研究を理解していただくためにあえてこのような便宜的な方法を選んだ。連関性が比較的強い部分を取り出したつもりであるが、論者が意図した研究手法の説明が欠けている部分があり、また、前後の文脈が不連続になっているため、唐突な語句や断片的に見える言説が説明なしに使われているとの印象は拭えない。不十分な報告になるが、私たちの

研究の一端を理解して頂く手掛かりになればと考え、このような形式をとることにしたことをご了解頂きたい。

II) 「資料の“見立て”に関する説明」

本研究の課題については先に述べた通りである。ここでは、調査研究に限定して報告したい。我々が本テーマに取り組むに当たり、その研究と調査研究という方法とのマッチングについて検討を加え、調査資料の選定とその分析方法に独自の工夫を仕掛け試案を作った。その意図は、仏教(者)と教育が今日の社会において具体的に接触する場面が教育の領域において存在するかどうかを探した結果、そのひとつとして仏教系大学(以下短大を含む)の大学紹介の冊子類(大学案内、シラバス、学生手帳、その他建学の精神を記した冊子など)を収集して、そこに述べられている内容を多面的に分析するという方法である。さらに、これら資料に基づいて、仏教教育言説の文脈をより直接的に理解するために、典型的な事例を選び大学関係者(出来れば学長)と面談することにした。資料を検討した結果、大学における仏教教育の理念や教育体制、行事とカリキュラムなどに加えて地域性や規模、共学、大短などの要因を重ねて合わせて、駒澤大学(東京、曹洞宗)の総長、飯田女子短大(長野、浄土真宗)の学長、筑紫女学園大学(福岡、浄土真宗本願寺派)の宗教部担当者と面談して、大学における仏教教育の現況と問題点について意見を聴取することができた。(残念ながら、今回の報告書にはその内容を直接的な形で掲載することはできなかったが、面談を通して本研究を展開する上での貴重なアイデアを得ることができた。)

ところで、大学案内の資料的価値についての我々の認識であるが、それらは受験生やその父母、学校関係者を対象にした冊子で、そこに高邁とも言える建学の理念や精神が十分に表明されているとは言い難い、という非難を受ける可能性を覚悟して、あえてこれらを研究資料として選ぶこととした。仏教系の私立大学が、自らの建学の精神をどのように社会に発信するかの典型的な局面のひとつと見立て、そこに現れる仏教教育を正当化する言説の分析を試みた。たかが大学案内であるがされど大学案内であって、それらは、仏教と教育と学問とを結ぶ理論的な筋立が分かりやすい形で簡潔に述べられているはずである。これらの資料には、我が国の仏教教育関係者が語った自己正当化の「大いなる

物語」が語られており、教育と学問にたいする使命の表明がなされていると期待した。そこでの教育論は、仏教的立場からの人間理解を「制度的」に表現したひとつの作品と見なされるものであり、言説の内容はもとより、その語りのスタイルや用語法さらにはレトリックやレイアウトに至るまで、情報の提供と入学を促す説得の仕組みの結晶といえるのである。そこで表明されているのは、もしかすると学生向けに勧誘を狙った資格商品の宣伝で溢れている（かも知れないが）、しかし、そのような文脈で公開された大学の理念や仏教教育もまた現在の仏教教育と大学に意味を理解する手掛かりたり得ると考えた。大学の教育と研究に関する外部評価のシステムは次第に整備されて来ており、その結果は運営のさまざまな場面に活用されているが、本研究はそれらとは角度を変えて、資料を特定して急角度（レトリック論的分析）から調査分析を試みようとした。

少し見立て方を変えると、大学案内とは受験生という消費者向けの宣伝広告のレトリック（90年代以降の表現を使えば“advertising rhetoric”と言えらる）を研究する素材であり、プラグマチックなコミュニケーション技法を発見する格好のテキストであると言えるのである。事実、関係大学から送られてきた大学案内やキャンパスライフの冊子は、いずれも趣向を凝らした立派なもので、通信販売のカタログを思わせるような魅惑的な内容が溢れている、という印象を持たせた。しかし、それらを読み進めると実はその表現はパターン化されていて、キャンパス風景の写真のアングルやモデルの学生の表情と所作、授業風景に至るまで、そのスタイルは画一的で陳腐化が進んでいる。そこには、受験制度に群がる広告宣伝企業とそれに依存して事業計画や生き残りを図る大学経営の体質を垣間みることができると思う。表現スタイルの画一化が進むなかで、大学はそれぞれの建学の理念を自前の言葉と文脈によって語り、他大学との差異化を図りながらそれぞれの存立根拠を訴える訳であるから、その言説を分かりやすくかつ相手の心に届く説得力ある形で作り上げることは、大学にとって大きな負担であるがそれはまた社会的な責任でもあるのだ。大学案内とそれに類する冊子を研究資料として取り上げることは、たかが冊子であるがしかし結果的には、大学教育がもつさまざまな現代の表情を読み取る手掛かりを得ることができると、考えられるのである。

仏教系大学がそこで展開する仏教的言説に拠る教育論と学問論を哲学的あるいはレトリック論的に分析することは、その言説のスタイルを問わず等しく現

代における仏教と教育の関係構造を明るみに出すひとつの試みであると思う。確かにこれらのテキストは、大上段に振りかぶった高尚な教育論ではないかも知れないが、しかし紛れもなく仏教系の大学として社会的にその立場を表明する以上、それぞれに仕方においてその理念を語っているはずであり、そのはずが外れていたとしてもそれもまたひとつの関係の在り方であって、決して排除されるべきではなく、むしろ大学教育における脱仏教、脱宗教を試行する現象として注目されるべきだろう。理念上はともかくとして大学の実際の運営において、さまざまな形で脱仏教を志向する傾向が見えて来る現状にあって、理想的なモデルを構想することは出来ないし、仏教教育の共通項を設定することもできない。また本研究の目的はそうした方向性をもつものではない。そうではなくて、仏教と教育の関係性を発見するために、それに対応するテキストを捜し出して独自の方法によって分析する立場に立っており、そのためのテキストとして、従来の大学教育論や仏教教育論では全く関心を惹くことがなかった、いわば研究の周縁部に位置する素材に目を向けた訳である。しかしそれらは、最も分かりやすい言葉で、仏教にさほど関心をもたない人々に向けて仏教の世界を語る訳であるから、その役割は重大であり教育的な価値は大きいと言える。そこには、仏教と教育の関係性を構築する、知的文化的から経営的に至るまでの、さまざまなコンテクストが合流する言わば異種交配が生み出した「仏教教育の現在」が現れているのではないだろうか。我々がその所在を上手く発見することが出来るかどうかは、資料分析の方法の精度と技法上の熟練とにかかっている訳であるが、この点に関して十分なレベルにあるとはまだ言えない。

本研究が使う臨床的という立場について若干説明しておく必要があるだろう。この立場の方法論的な根拠については、ここで紹介する事はできないが、それが、一般に流通している臨床の意味とはかなり異ったもので、心理的な意味での癒しや治療を指すものではない。ここでの臨床とは、臨床教育学の方法論に基づく概念である。それは心理学的と言うよりむしろ哲学的であり、意味発見を目指すという意味では解釈学的であり、「問題」事象に係わるという点では実践的な性格を備えていると言える。ここでの臨床とは、我々にとってすでに自明の事と物として受容されている意味世界において、その自明の世界に対抗する逸脱や病理の事象を手掛かりとして、生活世界に新しい意味を発見し、多様な文脈において世界と人間と自然を再解釈すること、この発見と再構成を

循環させる動的な文脈の生成過程として現実（「テキスト」）を理解しようとする立場を指している。したがって、世界や教育を基礎付ける究極の根本語句を想定して、理想の教育像の探求を意図するものではない。むしろ、そうしたファイナル・ポキャブラリーによってすべてを一元的に説明せんとする思考形式に対して距離をとって、教育的現実を意味付けている文脈の多様性と多元性を掘り起こして、その現実が多義的性格であることを発見することを目指すもので、言われるところの心理的情緒的な臨床とは異種の、より開放的で意味発見的な性質のものである。従って、自明世界からの逸脱現象が現代の病であり、それを克服して再び世界に適応復帰することをもって癒しや治療であるとは考えない。この点は、所謂「心の教育論」をどの様に位置付けるかのひとつの分岐点になると思われる、仏教教育論の論点を特徴付け、かつ評価されるところであると思う。つまり、逸脱や病理をそれとして意味付けているのは誰なのか、この事象とそれを解釈する立場との相互的な連関を問うことなしに、教育や人間を超然として語ることはできないだろう。そして、宗教なかでも仏教は、このような言わば主客互入の非対象化の文脈によって人間と世界を語る独特の言語装置を備えているのではないか、という期待がある。しかしそれが実体的に存在する「仏教的なもの」において継承されているかどうかは不明であるが、仏教言説によって《心の教育》が語られる文脈において、その言説がたどる軌道を見極めることによって、その性格は自ずと明らかになるだろう。であるから、ここで使う臨床的の意味は、仏教教育言説への深い期待と厳しい批判とが交錯した両義的性格を帯びたものになっている。

仏教的な語句や独特の文脈を駆使して純度の高い高邁な教育論を立ちあげ、宗派や教団の歴史と神話によってそれを権威付けて啓蒙と教化に取り組む、こうした教育観や教育システムに距離を置くことに努めた。つまり、広く流布している「仏教的」「教育」の思考パターンに懐疑的批判的な目を向けること、それらもまた深く現代人の病に侵されている可能性があるわけで、仏教だけが病を癒す特権的立場にあるわけではないことを自覚する必要があると考えた。先の臨床的な見立て方をすれば、純度の高い教育論や人間観はその高さゆえにむしろ空を撃ち、信念の無造作な強調が、確信の強さゆえにかえって独善化と単純化に向かう、それは現代の退嬰的な病理の一種ではないか、という懐疑的な文脈のなかに置かれるということである。

この種の立場からする仏教教育論に関する先行研究は多分存在しなかっただろうし、本研究自体が冒険的な企てであると言ってよい。ただ、このような発想や臨床概念の仕掛けによる先行研究としては、臨床教育学の立場から試みられた学校現場での不登校などの「問題」事象に関する実験的な取り組みであることを付言しておきたい。本研究の背景にある、臨床教育学の手法に関する説明は別の機会に委ねるほかないが、ここでは、臨床教育学が開発してきた問題言説の解釈学的・レトリック論的分析の手法を下絵として、先の資料をテキストに見立て解釈を試みたい。さらに言えば、理想の仏教教育論の構築や仏教的教育言説の《心の教育》への効能を宣伝することを意図するものではないことを重ねて明らかにして、研究のねらいに関する挿入的な説明を終わりにしたい。

資料について予め説明しておきたい。資料提供を依頼した関係の大学・短大は「仏教系大学協議会」に所属する大学である。そのうち資料が送られて来なかった大学または大短併設でいずれか一校の資料が送られてきたケースや平成18年以降学生募集中止を予定している大学など、資料入手の出来なかった大学を除く、合計57大学から資料提供を受けた。資料の依頼文では、建学の理念や精神に言及しているもの、仏教教育の実際が明らかになるシラバスなど、特定の資料ではなく本研究の目的に相応しい任意のものを依頼した。送られてきた資料は多種多様である。学生便覧(学生生活ガイド、学生生活ハンドブック、学生必携、学生生活の手引などの名称で呼ばれている)履修要項、大学要覧、大学案内(キャンパスガイドなど)、講義概要(全学、特定の学部、全学共通科目など)、仏教学の授業で使用中の教科書、入試ガイド、大学広報、宗教委員会発行の冊子、冊子「建学の精神」、大学博物館資料目録、○○大学の歩み(◇◇周年史)、あるいは、創設者□□の教育理念などその大学の理念と沿革とが詳細記載された資料から簡単な募集要項レベルのものまで、多種多様で統一されている訳ではないが、しかし、いずれの大学資料からもその大学の理念や精神を読み取ることはできた。

本研究は、これらの資料分析を中心のテーマとするが、これらの資料以外に、仏教系大学の全体的な形態や規模、関係する宗派及び大学での宗教行事の種類、行事への職員/学生の参加状態、などに関する資料を見る事が出来た(第13回仏教系大学学会会議研修会アンケート資料、平成18年度資料)。さらにまた、インターネット上で公開されている資料も適宜活用した。これは本研究にとって貴重な資料で、先の資料では判然としない部分が、こちらでは自己申告の形であるが、明

らかになった点が幾つかある。(平成18年度版の資料に関して、科研報告書では、研究に深く関わる項目を選びだし再編した「資料」を巻末に添付したが、本報告書では紙幅の都合もあり「資料」は割愛させていただく。ご了承願いたい。)

III) 「仏教教育言説の分析 (臨床教育学的試み)」

①考察の立場

先に述べたテキスト解釈の手法によって建学の理念に関する仏教教育言説を分析解釈する具体的な手続きを仮説的に予め以下のように設定してみた。もっとも、実際にはこの筋立て通りに進んだ訳ではないが、本研究の課題とそれを達成するための方法ないし仕掛けについて、特に何処に臨床教育学的なアプローチの特徴があるかを明らかにするためにも、その全体像を見せておくことが必要であると考えた。実際の作業過程で明らかになったことは、これらの調査項目があまりにも細分化されているため、資料中の言説を分断して語句が文脈から遊離する危険があり、項目間の整合を図る必要が出てきたことと、これとは逆に、テキストがかなりパターン化されており、個々の語句の多様さにも拘らず、文脈や言説のスタイルが予想以上に画一的である、という言わば二重の問題が出てきた。したがって、以下の報告では、仮説的に設定した観点を、重ね合わせて部分修正する箇所があり、全体的にも今後さらに精査する必要があると考えている。

a) 仏教(教育)言説の仕組みの考察

(a-1) 仏教系大学の自己根拠付けの仕方

「仏教とは…である」と言う明示的言説の有無とその言説の根拠付けの仕方〈仏典、開(教)祖、建学者などによる根拠付けと系譜のレトリックなど〉

(a-2) 象徴的神話的言説

宗派と教団の独自性の強調の仕方、確信的言説の仕組み、ファイナル・ポキャブラリーの使い方、儀式的語態の有無、権威付けのレトリックなど

(a-3) 現代社会に適合する順応言説のかたち

現実適応、肯定的未来志向、楽天的言説、直線的行動的言説など

(a-4) 現代社会への批判的対抗的言説のかたち

現実批判、価値相対化、悲観論的、内省的贖罪的言説など

(a-5) (a-3) と (a-4) とを結ぶ接続の語法の仕組み

順接的接続、逆説的接続、並列など

(a-6) 最終的語句の口調と説得の仕掛け

規範性と遂行性〈命令、共感、勧誘、反語など〉

(a-7) 建学の理念を表明するスローガンやモットーなど

決まり文句、常套的な言い回し、項目羅列など

b) (仏教) 教育言説の仕組みの考察

(b-1) 大学教育論の仕組み

(b-2) 仏教と教育を結ぶ共同化のレトリック

共同化の文脈と優先順位〈人間主義、心主義、精神主義、宗教教育における公／私の原理など〉

(b-3) 仏教(宗派)教育の一般化か限定か

仏教教育の課題や目的の設定方法など

(b-4) 仏教教育の内容と方法と形態

仏教教育の授業形態と方法、宗教行事の位置付け、空間の意味付けと命名の仕方、建学の理念の活用法など

(b-5) 仏教教育に関するカリキュラムとスタッフ

仏教科科目の位置付け、宗教／仏教／宗派の関係、教職員の役割など

資料の検討過程において抽出された項目はおよそ以上のもので、取り敢えず第一次的枠組みとして設定した観点であり、参考として書き挙げてみた。

②仏教(教育)言説の仕組みの考察

(a-1) 仏教系大学の自己根拠付けの仕方

(a-1-1) 仏教の一般的な立場から説き起こす

「大乘仏教の信念(精神)に基づく…教育」(2)「仏教思想とりわけ真言密教の視点から…」「仏教特に禪の教えに基づく…人格の形成」「仏教の教義

並びに曹洞宗立宗の精神」「仏教精神を根幹とした人格の育成」「仏教とくに浄土真宗の教えを建学の精神とし…」「宗教的信念のある真人を育成」

「維摩経」(2)「法華経」「仏説無量寿経」

(a-1-2) 教団の開祖・教祖や仏典の固有名を挙げる

親鸞聖人の教言(精神)をよりどころとする」(1)「聖徳太子の『和』の精神」「弘法大師の思想と実践(精神に則り、教育理念に則り)」(3)「曹洞禅の精神を根底において人間教育を行う」「法然上人」「仏教精神、特に親鸞聖人の『同朋精神』と聖徳太子の『和敬の精神』を建学の理念として…」

「聖徳太子の『十七条憲法』を基本理念として…」、
「道元禅師、瑩山禅師」

(a-1-3) 特定の宗派教団との関係を記す

教団の学寮・大学林設立以来の教学の歴史を説く (4)、本願寺派第21代門主を設立者とする、教団門主一族が発願した大学 (2)

(a-1-4) 現学長理事長以外に、大学学園の創設者(仏教信仰者)などの名前を挙げて建学の理念を語る

清沢満之、佐々木月樵、獅子谷仏定位上人、大島徹水、長谷川良信、澤柳政太郎、鈴木修学、高楠順次郎、水月哲英、足立閻劔、石橋湛山他

以上の類型は差し当たっての便宜的なもので、以下の項目と重複する内容がいくつかある。また、引用した文言が学則であったり学長や学部長によるものであったり一定していない(これは資料が多種類なためであるが何れも大学が発しメッセージであることには変わりはない)ため、文体は異なっている。

(a-1-1)にある「仏教特に(なかでも)」という表現は学則に多く、仏教の立場を限定してその系譜に宗派的立場が連なる自己証明の言表であり、精神や思想の系譜的連続性を強調するレトリックであり、殆どの大学がこの論法を使っている。(a-1-2)は、この系譜をさらに補強するために教祖開祖の固有名や彼らの精神として流布しているタームあるいは仏典の語句解釈によって説得力を強めようとしている。したがって「特に、なかでも、とりわけ」で仏教精神の継承を正当化する大学は、当然のことながら、宗派教団との関係が強く、大学設立の経緯が宗派による人材養成を起点にするものが多く、したがって、その歴史の古さを伝統として強調する場合が多い。宗派教団の精神を「仏教的

なもの」とするその見立て方を正当化するために、歴史の「古さ」や聖なる「空間」の物語（仏教教育の聖地、世界遺産をキャンパスとする大学、三宝の道場など、(a-2-2)にあげた表現がとられている）が効果的に使われている。それは仏教系大学としての存在を強調するために工夫された権威付けのレトリックであると言ってよい。それらに対して、宗派教団との結びつきをさ程強調せず、大乘仏教や仏教精神を掲げて建学の理念を語る大学もあり、理念論の構成法の違いがあって興味深い。

また、仏教者個人の信仰と教育論と仏教教育の功績を挙げそれを以て大学の理念をより具体的で確かなものとする、言わば例示による説得の手法をとる大学も少なからずあり、これもまた仏教教育の理念論の作り方であると言える。

(a-1-4)にあげた人物は、それぞれ大学の創設ないし改革に功績を残した仏教教育者の範たる人物で、仏教教育の理念の体现者であり教育実践のモデルでもある。彼らが語った信仰的使命感と教育観は純度が高く、その言説は恐らく、聞き手の人格を揺り動かす迫真性をもっていたことだろう。教育の理念には、その教学的な根拠付けや宗派的権威付けによること以外に、その語り手と聞き手の人格的關係といういわば人格的状況が重要な要因をなしていることを改めて教えられた。

(a-2) 仏教独特の語句や象徴的神話的言説

(a-2-1) 宗派教団固有の仏教的語句（ファイナル・ボキャブラリー）の引用と解説

「四弘誓願一響きあうところ、生かしあういのち」「旃檀林」「時機相応」
 「自信教人信のまこと」「本願他力の宗義」「智慧と慈悲心」「マンダラ思想」
 「随処に主となる（自主）」「行学一如（一体）」「和」「當相敬愛（自他共に是如来の一子なり、当に相敬愛すべし）」「回光返照」「相依相関の『えんぎ』」
 「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」「綜芸種智院」「大覚円成、報恩行持」「同朋精神」「宇宙の大生命を『仏』とする」

(a-2-2) 大学を権威付けるレトリック

「京都の地」「世界で最も長い伝統が息づく大学」「推古元年聖徳太子による四天王寺敬田院の開設」「世界遺産をキャンパスとする・大学」「光の真実の学園（大学の名称と建学の理念を一体化して、仏典からの由来である

ことを説く)」「本学は三宝の道場ともいえよう」、「(本学の場所は、開祖がはじめて教えを説いた) 仏教の聖地」、校章の象徴的意味を解説する

(a-2-1)には、宗派教団の独自性を表す語句が豊富に掲げられており、それらに仏教系大学ならではの解釈が施されている。これらはいずれも(a-7)で挙げる大学のスローガンやモットーなどと重複するが、大学の理念を表明するキーワードが巧みに組み合わせられ演出効果を上げていると言える。ここは、仏教系大学の理念の源泉である漢語が、それから日常用語へと語りのスタイルを変化させ、意味の翻訳と移行が起こる場面で、それぞれの大学の言わば腕の見せ所である。

大学案内などに紹介される学長らの話は、この部分に必ず触れており、その解釈や解説仕方には、原典翻訳型、意識型、同語反復型、比喩的転移型、体験的解説型、項目要約型、詩的改作型など、多様であり個性的でもある。これらの語句を解釈ないし解説する語りの文脈を探るために、分析の項目として(a-3)、(a-4)、(a-5)を設定して、仏教用語の解釈が展開される文脈の方向性を二分法的に、現実適応型と現実対抗型とに分けて類型化しようと計画した。しかし、この試みは十分に達成されたとは言えなかったが、幾つかの大学においては、その文脈が意識的に工夫されていて、仏教教育独自の理念構成の柱として機能していることも明らかになった。

全体の傾向としては、仏教語句の解説を「人格の形成と社会発展への貢献」に直接収斂させ、その結論に至る過程に、思いやりの心、心の時代、人間力、文化力、主体的な対応力などの語句を配置するスタイルが多数であり、そうした教育目標を語るためになぜ仏教の立場が必要なのか、つまり、仏教的な教育観において語られる独自性や必然性の説明が不十分で、使われる語句の斬新さ深遠さに比べて結論は陳腐であり、文脈における差異化も十分ではない、との印象をもった。なぜ仏教用語を使って人間や教育を語るのか、それは西洋の合理主義思想を批判してその挫折の諸相を語って、精神や心や魂の必要を仏教用語で語ってみせる、その程度の教育論であれば、仏教以外の立場からでも簡単に語ることはできるのではないか、ということである。このような傾向が強いなかで、さまざまな取り組みも一部で試みられている。例えばある大学では、浄土真宗の教えを「美しく生きる」意(こころ)と受け止め直し、その生き方

の条件を仏教的に根拠付け、美しく生きる具体相を言語化して建学の精神としている。この試みは、教養主義的で高踏的実体的な意味での美しい人像教育論とははっきり区別される、仏教的な世界観において生きる人間の在り方を日常語句によって表明した理念論として、関心を惹いた。

(a-3) 現代社会に適合する順応言説のかたち

『報恩感謝』の生活のできる社会人…思いやりの心豊かな知識人を両輪
 「人類の福祉と文化の発展に寄与…貢献する社会人の養成」『こころの時代』といわれる今世紀を担う人物「相互敬愛して和す」「グローバル化時代に必要な“人間力”を育てる」「21世紀を生き抜く決め手としての文化力」
 「人格の形成と社会奉仕」「社会の国際化と情報化、価値観の多様化が進む現代社会の変化に主体的に対応できる人材の育成」

(a-4) 現代社会への批判的対抗的言説のかたち

「権威や常識に支配されることなく、何が真実か、いま何が最も大切かを問いかけていく学風…科学万能、物質偏重、自然破壊、環境汚染を反省し…真の人間形成を目指す」「近代社会の合理主義的価値観が生み出した混乱を新たな価値体系へと導き」「常に“今、ここ、わたし”を問いかける」「自己保身楽達のみに汲々たる気風ではなく人類愛の精神に燃えて立ち上がる学風が」「戦争という罪を自覚し…このような悲惨な現実を克服できるように努め…平和を説く仏教の伝統によく学び」「率直に自己の過失罪悪を懺悔すると共に本来具する仏性を開顕して、人格の完成に」「利己を絶し自律した人間として、世界の平和と人類の福祉に向かって」(この他に、澤柳政太郎、佐々木月樵の訓辞がある。)

(a-3) (a-4) については、もう少し長文を引用しないとその文脈が読み取れないと思う。大学教育のすべてが仏教信者の育成を目指すわけではないから、現実の社会に対抗する批判言説を全面に出すことはできないが、しかし社会への寄与や貢献を説くにしても、もう少し緊張感が必要ではないだろうか。常識や権威に支配されるなど忠告し、新しい価値観の創造を促し、我欲を克服して人類愛に目覚めよと呼びかけ、戦争の罪を自覚と平和の願いを仏教において語

るなど、多数の大学とは言えないが、新しい世界観や人生観への覚醒の働きかけが試みられている。それらの多くは、創立者の言辞を引き継いだ形のものであるが、大学の意気込み使命観が伝わってくる。現代人の生き方について、大学が仏教の立場においてどのように語るか、その箇所を浮き彫りにしたかったが、その目論みは失敗におわったといえる。多くは、大所高所からの規範的教示的な文体で、人間の在り方を問いかける、自覚や覚醒に通底する言説は僅かであった。

(a-5) (a-6)については、目ぼしい資料が得られなかったことと他の項目と重複する部分が多いためこれらの項目は削除したい。

(a-7) 建学の理念を表明するスローガンやモットーなど

「和、恩、誠実、礼儀、健康」(学園訓)「行学一体、報恩感謝」(解説付き)
 「報恩感謝」「新しい時代の中で Mind of AGU」「本務遂行・相互敬愛・人格純真(三つのモットー)」「『人』を見つめ、『人』を育てる大学」「四弘誓願～響きあうところ 生かしあういのち～」「『いのち』一宇宙のいのちの本源への洞察」「『駒澤力』ある人間(自立した人材)」「テクノロジーとヒューマニティの融合と調和」「『使命観、人生観、連帯感』の3つの理念」
 「一 和を以て貴しとなす。一 四恩に報いよ。四恩とは…。一 誠実を旨とせよ。一 礼儀を正しくせよ。一 健康を重んじよ。」(学園訓)「感謝奉仕。菩薩道」「Together with him」「ひと・ところ・いのち」を大切に
 する建学の精神」「『ところ』の修練」「人間力。共生」「『共なるいのちを生きる』ことの自覚」「菩薩道」「『同朋和敬』の精神」「人間力を養う」「いのち、くらし、いきがい」「万人の福祉のために、真実と慈愛と献身を」「己事究明 『今、ここ、わたし』を問いかける」「無数の縁からなる自己と社会に目覚め Awakening、共創できる実践力を鍛え Link、次世代を切り拓く Growth」「『武蔵野大ブランド』の構築」「モラル×エキスパート」「(親鸞精神の説明の項目)『平等』の精神、『自主』の精神、『自省』の精神、『感謝』の精神、『平和』の精神」「正念・行学一如」「自律・和平・感恩」(校訓)「和、布施、和顔愛語、感謝の心」「立正の精神 三つの誓い 1、真実を求め至誠を捧げよう 2、正義を尊び邪悪を除こう 3、和平を願い人類に尽くそう」「三信条・我等は宇宙的人格を信ず、我等は感応の生活を行

う、我等は現身完成を証す」「三つのスローガン・人生の主体者となる、共に歴史と世界を生きる、問いを学ぶ」「社会の様々の分野で『菩薩』として活躍する」

沢山の語句やモットーや校訓など、文字通り異種混交であり、この項目は仏教系大学教育論のハイライトである。さまざまな文脈で語られたものを抜き書きしたために、意図された内容からずれてしまった可能性があり、この点予めお断りしておきたい。いずれの大学もほぼ例外なくこの種のスタイル、いわばスローガンに類する言辞を開発しており、それぞれ大学の仏教教育の個性を端的に現わしている。これらの多くは(b-2)で検討する仏教と教育を結ぶカテゴリ共同化の役割も担うもので、仏教教育独特の教育言説に見立てることができる「根源語」の風景といえるだろう。

宗派や教団独自の教義を表す聖句や言辞を全面に立てて仏教的世界観を直接訴えるものから、先覚の言葉によって人生の規範モデルを語るもの、さらには人生訓や生活指針を示すことで大学教育の使命とするものなど、いずれも確信に満ちた「根源語」によって人間の在り方の「根本」が力強く語られている。人間の在り方の「根本」や理想の像を明快簡明に言い切ることができる、この点にこそ仏教系を名乗る大学の特性があると言える訳で、いずれも精練された意味深重な内容を表現していると思う。

こうした確信的なモットーや語句は、人生の指針として貴重であり、宗派教団が蓄積してきた教化と感化のための得難いテキストで、それらの語句が齎す人間形成の次元や領域に注目して、ひろく教育的な意味発現の仕組みを解明することは、仏教教育研究の魅力的な課題であると思う。さらにまた、ことごとその語態が教育において、とくに「生き方」を提起する次元での教育（感化や教化と呼ばれて来た次元）において、どのような役割を演じているかを開明する事例研究として極めて重要と言えるよう。これらの語句が、先に見た、さまざまな形での権威付けのレトリックで文彩されて、儀式的な場面で語られるとすれば、その「教育的」効果はかなりのものと想像できる。

仏教言説のスタイルとして、短句や漢字熟語で表現される言辞の仕組みは古い歴史をもっており、経典や身近な説話や教訓として蓄積され、そのレトリックは巧妙にして複雑である。このような言語方略は、今回の資料にも継承され

ている。ここでそれを個別に検討することはできないが、例えば、意味的に或いは音韻的に類似する語句や語を列挙して言説に説得力つけ音声的にもリズムを与えることができる〈類義語累積法〉や〈列挙・烈叙法〉さらに〈継起的音喩法〉が使われている。これらはスローガン作りに多用される手法であるが、建学の理念言説にも広く浸透している。特に仏教教育論として目立つのが比喩法である。比喩という意味転移、意味変換の仕掛けの中核の働きは、さまざまな意味での〈類似〉を使った転義の仕掛けであるが、なかでも宗教言説が得意な方法は、象徴的暗示による〈精神的隱喩法〉や〈意味連想法〉さらには権威付けの方法である〈引喩法〉などであり、先に紹介した語句にそうした言語戦略法を読み取ることができるだろう。他にも、大胆な省略による〈黙示法〉、「如」に典型的に見られる〈直喩法〉、少し分かり難くいが「駒澤力」に使われている〈換称法〉、〈共通トポス〉としての「いのち」などなど。

これらのレトリックは説得と表現の技法で、ある意味、宗教言説の最も得意とするところで、この項目に上げられた言辭はその「宝蔵」であると言えるだろう。

ところで、これらの「言語的な仕掛け」は問題もはらんでいる。こうした簡潔で意味豊かな言説は、レトリックも巧みで読み手に向けて説得的であるが、それはメッセージの受け手に対してと同時に、その内容は発信の当事者に向けても意味を伝える。それがまさに「根源語」であるがゆえに、大学はそれ自体においてその意味を、それは当然限定された仕方においてあるいは象徴的な意味において、主体的に具体化する責任を負っている。その具体相を、客観的あるいは儀式的に表現する必要は必ずしもないと思うが、大学の在り方や教育の課題を語る文脈において行動的であり明示的でなければならないだろう。この論点を広げて言えば、それらの言辭が、現代の人間の在り方とどこで、どのように交差しているか、という問いこそは、まさに仏教思想の根本的な課題であって、これら「根源語」と現代の関係それ自体を教育の課題として提起すること、いわば反省的な実践の仕組みが大学のどこかで作動することが必要であって、もしそのような大学教育自身への反省的な自覚（現代「人」教育への《覚めた意識》）を促す態勢を衰弱させると、これらの「根源語」は聖域を支える道具として手段化して、創造的開放的ではなく逆に抑圧的閉鎖的に機能することになる。大学システムの構成原理をささえる源泉として、構成員の内面に呼びかけ

る自己覚醒の働きとして、これらの「根源語」が内在化人格化されているかどうか、である。この自己内在化のレトリックを工夫して蓄えているかどうかを課題だろう。

一部の大学では、仏教教育に関する領域を特定部門に限定して大学教育の全体的機能の分節化専門主義化を図っている。仏教教育を機能的に特化することは一般的な、そして恐らくは不可避的な過程であると言えるだろうが、こうした機能分化を進める大学において、建学の理念はスローガンとして全学的に響き渡っているが、それはよく言えば象徴的であるがしかしそれは形骸化陳腐化と隣り合わせの状態でもある、と言えないか。たとえ、大学教育の専門主義化が不可避的であるとしても（しかし、この傾向は我が国の大学教育の体質に由来する側面もある訳で、かならずしも一般化はできない）、そうした大学教育の在り方に対する問いを出すこと、それを相対化する対抗的な言説が産出する世界として大学を理念化していくことが求められるように思う。

この状態はしかし、仏教系大学固有のものではなく、むしろ今日の社会における宗教一般が当面している脱宗教化の時代を映し出したものであると言えるだろうが、仏教系大学においては、仏教精神を理念として掲げる大学であるがゆえに、この事態を自己先鋭化して、仏教自体の状況として受け止めることが必要ではないのか。であるからと言って、声を大にして仏教的「根源語」で人間や教育について語ることが、この事態克服の処方であると言うのでは決してない。そのような対応の仕方でも克服できる場所に問題はもはや所在していないのである。そうした対処法が有効と考えるその思考と行動こそが、むしろ問題をさらに奥に追遣って、その様相を隠蔽することになると思う。この意味で、仏教教育の在り方を問うことは、「仏教の現在」を自明の前提として、その精神をいかに教えるかという方法論レベルのことではなく、その問いは常に同時に「仏教の現在」に向けられていなければならない。大学の財産ともいえる語句が、大学内部でその意味をインフレ化させ、現代を批判して慨嘆する時事批評の決まり文句の類いに転落していないかどうか。語句はその意味を、それが置かれる文脈において変容させるものであるから、それが帯びている意味は絶えず自閉化と散逸化の危機にさらされているのであって、不変的意味を自足させているわけではないのである。

ところで、仏教用語を使うか否かの判断を含めて、より多くの読み手の関心

と興味を惹くためにコミュニケーションな仕掛けがその表現に込められているわけであるから、その点では、これらの表現法は企業の広告宣伝の手法に類似しており、教育の理念や目的を単純明快に語るという必要に迫られて、教育論がその言説の形式面でスリップダウンしている可能性がある。つまり、大学教育を語るスタイルが大学教育の内容以前のところで、そのイメージや役割をすでに変容させられているということである。決まり文句やスローガンあるいはモットーや格言など、省略と比喩と暗示と誇張あるいはエトス的な例証や権威による推論など、先の短文短句で駆使されている多数のレトリックが、受け手の認識の仕方や感性と行動にどのように働きかけ影響を与えているのか、そして、そのようなスタイルで語られた大学と教育の意味はどのように仕立て上げられているのか、この種の問題が大学教育言説に潜んでいる（それを病理と呼ぶかどうかは別にして）ことを今回の調査は示唆していると思う。

③（仏教）教育言説の仕組みの考察

b) 仏教系大学の教育論

(b-1) 大学教育論

「禅的教養を基とした『行学一体』の人格形成」「仏教の基本は『慈悲』（人格形成）と『智慧』（学業）に凝縮できる。…（これを大学教育の両輪に譬える）」「人間が人間について学ぶ実学…（人間学こそ真の実学）」「理論と実践の融合」「共に学ぶ場の充実」「人文学の新たな知の体系の創造をめざす」「共生をめざすグローバル大学」「真の人間たるにふさわしい世界を開くことを目指す」「仏教精神に基づく『心の教育』」

大学教育論として単独で扱ったものは少なく、大多数は(b-2)の形で述べられているため、ここでは取り上げないことにする。ただ、巨大規模大学では大学の役割を自覚した、この項目に属する言説が認められたこと、また、福祉系大学やその学部をもつ大学では、(b-2)(b-3)で明らかになるように、いのちと共生をキーワードにして社会との関係をより強調し、教育の目的を明確にしている点が特徴的と言える。

(b-2)(b-3) 仏教と教育を結ぶ共同化のレトリック

「行（人間形成）学（真理を学ぶ）一体」「行学一如（理論と実践の融合）」
 「智慧と思いやりの心」「高い学識と豊かな情操を持った人材の育成」「形よりも魂の精神を大切にせる教育」「人間として生きる『知慧』の学修」「仏教を首位とする大学」「自利即利他」「単に知識を会得するだけでなく、その実践行が相応しなければならない」「なんとなく靈的雰囲気学内に漂う」「優れた叡知と豊かな情操を具えた教養人」「『共に生きること』を学び、真の人間形成を目指す」「『共なるいのちを生きる』ことの自覚にめざめる」「『いのち』を敬う人間になる」「科学技術を『人間の幸福と安全』のために生かす知恵と力を」「禅的人間教育」「『天上天下唯我独尊』（一人ひとりのオンリーワンの輝きを育む教育）」「仏教の自覚に依って…自己の知性（智）と感性（情）とを統一」「限りない〈いのち〉への自覚をうながし、社会の中で自己実現する人の育成」「正しい人生観の涵養」「慈悲深く、心豊かな人格の養成」「知識の量をきそわずそれを人生に生かす“知恵”を養う」「仏教の教養に重きを置く大学教育…信仰に生きる人物の育成」「学問・知識の詰め込み教育ではなく、自分自身のありのままの姿をごまかさず見つめ、人としてのより良い生き方を考える『心の教育』に重点を置く」「仏教精神に基づいて『1、科学の真理を窮め…使命観を養え。2、深く科学を学び…正しい人生観を養え。3、学生、教職員及び父兄が一体となり…連帯観を養え。』」「普遍的にして個性豊かな人格を養成」「『自己の内への問いかけ』を基本として…」「仏教精神に生きて社会の福祉の貢献する人材の育成」

仏教と教育という異種のカテゴリーを結ぶレトリックは、仏教言説の得意とするところで、「一体」「如」「即」などがその典型である。調和と融合と統一と結合を独自の用語で語る包摂や全体化の論法がある一方で、優先や選択を呼びかける勧告（奨）の言説を設定するなど、文脈構成は多様で、その形式自体にすでに教育的な意図を読み取りことができる。「慈悲」や「知慧」を多くの大学が使っているが、それが特殊仏教的な意味を表す「換称」であったり、象徴や記号の役割を活用して意味論的な連想を促す転義法であったり、場合によると実体的な行動指針であったり、その意味発現の仕組みは定型的ではなく文脈依存的であり多層的であって、それぞれの大学の意図の違いを見せている。また、

「高い…、深い…、豊かな…、優れた…、正しい、重き、良い」など、なじみ深いがそれとは気づき難い、豊富な比喩表現を使うことで、目的達成を促す上昇的な漸層法による教育論を作っている。事例的に見ると、福祉系大学の多くが「共に生きる」という「いのちの共生」をトピとして教育論の展開している点が共通している。それ以外にも、仏教の人生観や座禅の体験が医療に携わる人間の心の成長に寄与すること、「慈悲」（共感する心）の心は薬剤師に不可欠である、などとして、人間形成一般ではなく個別の領域に結びつけて実用主義の文脈に仏教教育の語句を転義して活諭する大学もある。

(b-3) との関係でみると、仏教教育の形態として注目される「行」の概念と教育の課題あるいは目的として強調される「自覚」の概念がある。これらは、その類似語（句）である形成、養成、涵養、育成、学修、育む、養う、などなどに紛れてその意味付けは必ずしも明確でなく、それと教育の方法や内容との関係もはっきりしないけれども、しかし仏教の伝統的な教育論を継承する語り方として使用されており、それを意味付ける仏教的な言説の仕組みに改めて関心を向ける必要があると思う。

(b-4) 仏教教育の内容と方法、宗教行事の位置付け、キャンパス空間の意味付け、建学の理念の活用。(b-5) 仏教教育のカリキュラムなど。

この項目に関しては、別のところで詳細な考察がされるので、ここではそのうちの宗教行事とカリキュラムに関して簡単に述べることにする。大学によっては、一部の行事に学生の参加を義務付けているところもあるが、行事の形態や内容、実行の主体など詳細に不明な部分が多い。しかし、この行事は宗教教育の一環としていずれの大学でも極めて重視されており、大学案内などで写真入りで紹介されている。行事や儀式への参加が集団への帰属意識や連帯感を育てることはつとに指摘されてきたが、それらに参加を強制するのではなくより祝祭的な要素を加えて、主体的に宗教文化を創作する機会として再構成する企画が幾つか試みられているが、その構想は評価されてよいと思う。

授業科目としての仏教教育は全ての大学がカリキュラムに組み込んでいる。ただ、必修か選択かについては、一部の例外はあるが概ね必修で、単位数は多いところで12単位、4～6単位必修が平均的なところである。これら宗教教育科目の内容の詳細は不明であるが、シラバスを見た範囲では仏教思想一般を紹介する授業が一般的である。なかには、宗教の講義の一部として仏教を位置付

ける大学もあり、逆に専ら大学の建学の理念に関わる教祖の思想や宗派の教学で講義が構成される（建学科目）場合もあり、その幅は広く多様である。授業は講義形式が中心のようであるが、学生の日頃の関心や悩みなどを仏教思想の立場から話題にしていく授業者の姿勢も見て取ることができた。授業には、写経や座禅、瞑想、宗教行事への参加などを取り入れた大学も幾つかあり、限られた時間の中で仏教系大学ならではの工夫が見られ、概ね担当者の意欲は旺盛であると言えるだろう。

（執筆者 皇 紀夫）